

# パターン性と一般性：パースの哲学から創発を考える

Jimmy Aames

大阪大学人間科学研究科・日本学術振興会

創発をめぐる哲学の議論でよくなされる区別に、認識論的創発(epistemological emergence)と存在論的創発(ontological emergence)の区別がある。認識論的に創発する現象は、観察者の認識論的な制約のため、創発元となる諸々の要素ないし過程によって実際的には説明され得ないが、原理的には説明され得るような現象である。それに対して存在論的に創発する現象は、実際的にも原理的にも、創発元となる諸々の要素や過程によって説明され得ないような現象である。存在論的創発の事例が自然の中に実際にあるかどうかに関しては議論がある。私は、存在論的創発の事例があるという立場（ラディカルな創発主義）と、すべての創発の事例は認識論的だという立場（存在論的還元主義）の双方に問題があると論じる。私が本発表で目指すのは、認識論的でも存在論的でもない、第三の創発の形態の概略を示すことである。これは Charles S. Peirce と Daniel Dennett のアイデアに基づいたものであり、ラディカルな創発主義と存在論的還元主義の双方を避けることを可能にする。この種の創発において創発するのはリアルなパターンであることから、私はそれをリアル・パターン創発(real pattern emergence)、あるいは RP 創発(RP emergence)と呼ぶ。

パターンの本質的な特徴は、それを例化する諸々の要素や過程よりも一般的だという性質である。つまり、同じパターンが異なる個々の要素や過程によって例化され得る。パターンは、その一般性ゆえ、一般者に関する Peirce の豊かな理論、とりわけ彼のプラグマティズムとスコラ実念論を応用するための格好の候補である。私は、リアルなパターンは Peirce が「リアルな一般者」（あるいは「リアルな第三のもの」）と呼ぶものに相当し、リアルな一般者と同様、単にある与えられた状況で何が起きるか(what will happen)だけでなく、現実には生じない様々な可能的状況で起きるであろう事柄(what would happen)に関する予測を可能にするため、それを例化する諸々の要素や過程に還元され得ない自律的な存在様式を持っていることを論じる。リアルなパターンのこの自律性が、RP 創発を（存在論的創発との区別を潰すことなく）単なる認識論的創発から隔てる鍵となる特徴である。

また、RP 創発と、関連する Mark Bedau の「弱い創発」(weak emergence)の概念との違いについても明確にする。